

綱引きや駆け引きのその先にあるもの

前期期末テストも終了し、いよいよ来週末には、新風祭（体育祭）を迎えます。生徒会が中心となって全校生徒が考えてくれた新風祭のスローガンは、「心をついに」。シンプルで、端的にみんなが目指すべき姿を表したものだと思っています。

新風祭を楽しみにしている生徒が多くいる一方で、運動がそれほど得意でない生徒の中には、ちょっと憂鬱に感じる生徒もいるのではないのでしょうか。でも。終わってみれば、みんなで力を合わせて競技や応援に取り組み、一つの目標に向かって一丸となってやり遂げた達成感・充実感や感動はかけがいのないものだと感じるはずで「心をついに」。それが、まさしく体育祭の良さ、体育祭の存在価値です。

今年度もこれまで、各競技の内容や各軍団の応援の中身など、生徒会や3年生の応援リーダー中心に準備を進めてきました。また、パネル担当の生徒も、夏休み中何日も学校に来て、パネルの制作に取り組み、夏休み中にとってもレベルの高いパネルを仕上げてくださいました。今週から、新風祭に向けた本格的な練習に入りましたが、すばらしい新風祭になることを心から祈るばかりです。

さて、毎々体育祭を実施するにあたり頭を悩ますのが、学年や全校の種目を何にするかです。

学校によっては、毎年毎年一から考えて決めるのはたいへんなので、数年間同じ競技を固定して実施しているところもあります。しかし、その時々々の生徒の希望や意見が反映されないデメリットもありますし、担当の先生の希望や思い入れなどもあります。また、競技内容自体を生徒自身が考えることが、ある意味生徒自身の成長の糧としての勉強になります。当校は、その年ごとに、競技内容を担当の生徒が中心になって先生方に相談しながら考える形にしています。最近の一般的な傾向は、その学校の実態に合わせて、数ある定番の競技にちょっと一工夫凝らしてという形が多いように思います。

私が体育祭で一番好きな競技は、「綱引き」です。

綱引きは、かつてはオリンピック競技だったということをご存知な方も多いでしょう。1920年のアントワープ大会までは正式競技でした。現在も、綱引きの国際大会が盛大に開かれ、国際オリンピック委員会(IOC)に加盟している国際綱引連盟(TWIF)という組織が、オリンピック競技への復帰を目指しているとのこと。

私が、「綱引き」を一押しする理由は、主に、下記の3つの点からです。

- (1) 準備する用具が綱のみであること
- (2) ルールが単純明快で、勝敗がわかりやすいこと
- (3) 個々の力量が全体の勝敗にどのように影響したか不明であること

(1) については、綱の移動や、綱の位置の調整、綱を巻く後かたづけにやや手間はかかりますが、細々した道具を準備・セットする必要がなく、基本的に綱一本というのは確かに面倒ではありません。

(2) は、特に観戦している側から見ると、多少遠くから離れていても勝負の行方や結果が一目瞭然なので、後腐れがなく終われます。例えば、騎馬戦などは、相手チームがたたいたとか、やれ帽子を押さえてズルしたなど、競技中や競技後に不満がでることも、これまで何度も経験してきました。綱引きにはそれはありません。ただし、本当の競技スポーツとしての綱引きは、明確で厳格なルールが設定されていますが、体育祭では、全体の人数合わせの調整くらいで、厳密に言えば公平ではないのは言うまでもありません。

そして、重要なのは(3)です。例えば、全員リレーなどは、足の遅い子が何人にも抜かれたりすると、心ないチームメートから「おまえのせいで」なんて言われたりすることも懸念されます。逆に、ゴボウ抜きして勝利の立役者になった子はヒーロー扱いかもしれません。

ところが、綱引きは、誰もが平等な立場で競技に参加し、誰がどれだけの力を発揮し、その力がチームのためにどれだけ役に立ったかは、誰にもわからないのです。ですから、極端なことを言えば、

頑張っているように見せかけて、実はいい加減に手を抜いていても誰から責められるわけでもなく、逆に、どんなに必死に頑張ったとしても、ヒーロー扱いされることはないのです。

実際は、どこの学校でも、もちろん当校の生徒の中にも、わざと手を抜く不届き者は存在しないはずですので、まさしく「ONE FOR ALL」を体現する競技として、綱引きは、やっぱり体育祭競技の王様だと考えます。

運動会やチーム分けで「紅白」に分かれるのは、その昔の源氏と平氏の源平合戦で、敵と味方を間違えないように、平氏が白旗、源氏が赤旗を掲げて戦ったことに由来すると言われています。

この「紅白」と同様に、物事の是非や善悪をはっきりさせることの慣用句で、「白黒をつける」という表現もあります。

「綱引き」という言葉も、慣用句として、何らかの利害関係により複数の組織や団体が相互に圧力をかけたり牽制したりしながら、自分側に有利に物事が運ぶように画策したり工作し合う意味で使われます。

このように、体育祭だけでなく、勝敗を競い合う性質のものには、「敵味方」「真逆」「裏表」「分断」「対立」「駆け引き」など、負の内容を意味する表現が多いのは当然です。しかし、新津第二中学校の新風祭は最終的にそうあってはなりません。

昨年度も話しましたが、みんな目指す真の「3冠」とは、他のチームとの相対的評価である競技・パネル・応援の「3冠」ではなく、個々やチームとしての絶対的評価である『感動』・『感謝』・『感激』の「3感」です。

そのためには、「〇〇のせいで」「△△の責任で」などという思いを、誰にもしない、させない、感じさせないような、互いのひたむきさや一生懸命さを互いに認め合い、支え合い、互いを応援したくなる、創立77周年に花を添える熱い熱い戦いを期待しています。

「心をひとつに」。スローガンに込められた思いを深くかみしめながら、クラスでひとつに、チームでひとつに、そして最後に全校みんなまで一つになろうよ。